

中村健教授退任によせて

## 『中村健先生との出会い』

### 菅 徹

中村健先生からの退官記念論文集への投稿依頼を受け、大変有難く身に余る光栄だと感じています。この機会に先生との出会いから今日まで、そして、今後についても思いつくまに述べたいと思います。

まず、出会いについて述べましょう。それは、1994（平成6）年4月、兵庫教育大学大学院に入学した時からでした。健さんは東大阪市立中学校の社会科教師。私は、奈良県立高等学校社会科教師。健さんは社会系講座に所属しておられました。私は、臨床系の生徒指導講座でした。所属講座が違うこともあり、入学当初全く面識はありません。ところが、健さんは生徒指導関係の選択科目の授業を受けておられたように思います。生徒指導講座のメンバー以外の人がいるな、との思いしかありませんでした。直接お話ししたのは、おそらくカウンセリング実習の授業あたりからではないかと思います。いつの頃からかよく話すようになりました。

もう一人、重要な人がいます。健さんと同じ社会系講座で、大阪市派遣の小学校教師である山崎先生です。私たち院生の最大の課題は修士論文を書き、学位を取得する事でした。当時、現場教師のリカレント教育が強調され始めた頃でしたが、私にとっては遅れてきた大学院生としての、しかも二年という限られた中で、論文課題を見出す作業の困難に遭遇し始めた頃でした。それを克服するには、やはり、同じ悩みを共有する仲間の存在が重要だと思われまます。その点で論文の進捗状況について忌憚なく意見を言い合える中村、山崎両先生の存在がどれほど心の支えになったことか、今更ながらお二人には感謝しかありません。このような単身寮での人間関係の深まりは、論文作成の目途が立ち、終盤に至るころまで続きました。

そして、大学院修了の三月まで四ヶ月を残す1995年12月に差し掛かり、まもなく現場復帰という頃、また、修士論文の提出締め切りの頃で、論文発表会の準備で緊張した毎日を送っていたように思います。大学事務局から単身用学生寮が近く改修工事の為、退去の要請がありました。そこで、三人で事務局と交渉した結果、外国人留学生用家族寮に入居決定となったのです。修了まで残すところ、三ヶ月余を三人で共同生活する事態となりました。入学以来、何かと一緒に行動することが多く、お互いに遠慮のない関係になっていました。家族寮は3LDKという事でそれぞれに個室があり、快適に暮らすことができました。そして、共同自炊生活が始まりました。この時、夕食の献立メニューを作り、夕食材料の買い出しに行ったことや出てくる料理の美味しいこと言ったら…ビックリでした。健さんの腕のいいこと。この頃、NHKと中国中央電視台共同制作の『大地の子』の放映が始まりました。三人で涙しながら視聴したことを昨日のこのように覚えています。また、山崎さんが夜遅く唐突に「今から温泉に行こう」と言われ、真夜中の中

国道を一路西へ、名湯湯原温泉の川沿いにある露天風呂に浸りながら、朝方、寮に帰ったのもいい思い出です。ここまでが、二年間の「陸の孤島」でのまとめです。

四月になり、三人とも現場復帰しました。健さんは中学校の教頭として、山崎さんも現任校に着任。私も現任校に復帰して、個別の教育相談と学内での教育相談室開設のために奔走し始めました。光陰矢の如し、数年が経過したと思われます。健さんは東大阪市教育センター指導主事に転任。山崎さんは教頭になり、健さんは以前から中学校で臨床心理士をどのように学校現場に受け入れるかという問題意識を持っておられました。大学院では研究テーマを「教育現場に、より効果的なスクールカウンセラー受け入れを模索するための実証研究」とされました。当時の最先端研究であったと思っています。当時、文部省による「スクールカウンセラー活用調査委託事業(1995)」が始まったばかりでした。この時期に学校現場の一教師が考えていたとは、驚くばかりです。生徒への暖かくやさしい気持ちの延長線上に中村健先生の見識を深く感じています。さて、私は高等学校で教育相談室運営と学校教育相談の深化に励んでいました。その頃、すでに健さんは大学に転任されており、私は高等学校に度々、講師として中村先生を招きました。その一コマと受講者の感想を紹介します。

テーマ：「子のこころ、親のこころ」一見つめ直して気づく、生徒指導の秘訣(2006)―

「中村先生の中学校現場での豊富な生徒指導実践に基づいた問いかけは驚きの連続で参加者を引きつけた。例えば、頭の思考回路を増加できたと思う。先生の技術と情熱に感動した。」(男・40代)「思わず、一保護者として、先生のお話に引き込まれておりました。生徒の指導上でも、いろいろ悩むことがあり、今日の研修会で聞いたことを参考にさせていただきたいと思います。」(女・40代)以上、参加された先生方からの声です。私は、健さんに講演を依頼して本当に良かったと思いました。一番の驚きは40人程の先生方の誰一人として眠る人がいなかったことです。あの光景は今でも忘れられません。

その後、健さんから「大学で非常勤講師をしてみませんか？」と話があったのが、57歳の時でした。不安と興味半ばでしたが、健さんが勧めてくれたことで、思い切って飛び込んでみました。公務員生活とお別れです。それからは、いろんな教育相談研修の場に誘ってもらいながら勉強させていただいてきました。特に印象に残っているのは、日本学生支援機構と日本学校教育相談学会研修会での分科会の座長を二人で務めた折に、参加者の思考の方向性を把握したうえでの的確な誘導・集約の力です。私は、本当に多くのことを学ばせてもらいました。

健さんの一声から、第二の人生が始まったと思っています。その意味で私の人生の恩人です。健さんの口癖である「隙間産業請負業」の発想は、学校現場出身だからこその発想ではないかと思っています。今、私は高校でスクールカウンセラー、非常勤講師として先生方の手伝いをしています。学校現場から離れて久しいのですが、制度化されたスクールカウンセラーの配置によって、本来あるべき児童生徒・教師の関係性に危惧を持っています。不登校生徒に困った担任教師は、カウンセラーに任せきりならば楽になる。しかし、その苦しさを共有しながら関係をつないでいく作業はどうなっているのか。今こそ、教育の原点に戻るべきだと思います。

初めての出会いから、二十八年が経過しました。中村健先生は、どんな人か？ 一口で言うならば、「いつも変わらない温かな人間性の人」ということです。この人間性の発露はどこにあるのか、その源泉は何であるのか。今後も切磋琢磨して、発見していきたいと思っています。